

母は 7 年前に退職したおり、なにか趣味をもちたいと、朗読の会に入った。独りぐらしなので、できるだけ声を出す習慣を身につけたかったらしい。

さいわい、全員年下のなごやかなお仲間に恵まれ、10 分以内で朗読できる短編や、長編の抜粋を、一生懸命に練習しては先生やお仲間に添削していただいている。

昨年春に、区の施設で朗読のミニ発表会があり、わたしも応援かたがた見学に行った。母は、向田邦子の〈だらだら坂〉という短編を、練習の成果をのぞかせて淡々と読んだ。それは、初老の男が、特に愛してもいない若い娘を妾として困う、滑稽で、かつ悲哀にみちた話だった。なぜ母がその話をえらんだかわからないが、わたしも向田邦子の作品は大好きなので、なんの抵抗もなく耳にした。

ところが、今年の発表会の選書にあたって、母は、もっと自分がこころから読みたいと思える作品をえらびたいと言った。なるほど、母は〈だらだら坂〉を、多少のとまどいで消化しようとしたことがわかった。たしかに、80 歳を過ぎた女性に、妾を困う話は、体に悪いかもしれない。

わたしは試しに、斎藤隆介の〈花さき山〉と新美南吉の〈ごんぎつね〉の二冊を見せて、「こんなのどお？」ときいてみた。母は、まよいなく〈ごんぎつね〉をえらび、その後 3 ヶ月にわたってよく練習をした。

そして発表会の当日、ふたたび応援に行ったわたしの前で、母は 17 名の出演者につづき、〈ごんぎつね〉を読んだ。読みまちがいは若干あったが、母の読んだきつねは、撃たれても堂々と横たわる、気高いきつねだった。